

外国につながる子どものことばを育てるワークショップ

—第4回実践報告—

松田朋子 (お茶の水女子大学大学院)

柳恒嬌 (お茶の水女子大学大学院)

チッターラーラック チャニカー (お茶の水女子大学大学院)

1. 本ワークショップについて

本発表は、大学院生を中心に有志で行っているワークショップの実践報告である。本ワークショップは、外国につながりを持つ子ども達に対して、継承語に接する機会を増やし、日本語や継承語への興味を引き出すこと、両言語の産出を通して、子どもたちに自らの多言語・多文化的な背景に対する価値を感じてもらう場を提供することを目的としている。

2016年に開始し、これまで年に2回、計4回開催してきたが、本発表は第4回の実践報告となる。活動は、子ども一人に対し日本語母語話者と継承語母語話者の支援者がペアになり行っている。ワークショップでは、多言語での絵本の読み聞かせから始まり、絵本の感想を共有したり、オリジナル絵本を作ったりするなどの様々な活動を行っている。支援者は、絵本を読み聞かせたり、一緒に作品を作ったりする中で、日本語・継承語のやりとりを通じて両言語での自然な発話を促すように努めている。

2. 第1~3回目までのワークショップ

第1回目は、テーマを「わたしの好きなもの」とし、支援者と子どもと一緒に作品を作った。しかし、十分なインプットを与えないまま活動を行ったため、子ども達から両言語の自然なアウトプットを引き出すことができなかった。そのため、第2回目では、最初に絵本の読み聞かせを行った。そうすることで、適切なインプットを与えることができ、前回と比較してアウトプットを促すことができるようになったと考えられる。また、読み聞かせの後で、子どもの年齢や興味に合わせた難易度の異なる様々な活動を行った。しかし、支援者が継承語のインプットを与えようとしすぎたため、子どもに負担をかけてしまうという問題が残された。第3回目では、多言語での読み聞かせを行った後で、ゲームの形を用いて日本語・継承語の単語に触れる活動を行った。ゲーム形式を用いることで、子ども達は楽しみながら両言語の単語に触れることができ、支援者は子ども達の成果を観察することができた。遊びを通じて、自然な形でのインプットを与えることができたことは、本ワークショップの一つの成果だと思われる。

3. 第4回ワークショップ

第4回のワークショップは、休日の午前中に2時間行った。参加者は、中国、台湾、タイにルーツのある子どもで、年齢は2歳半から7歳である。テーマを「自然」と設定し、自己紹介を行った後で、全体で日本語と継承語での読み聞かせを行った。使用した絵本は『はらぺこあおむし』である。日本語、中国語、タイ語での読み聞かせだったが、自分のわからない言語であっても子ども達は熱心に聞き入っていた。その後、子ども一人と支援者二人のグループに分かれ、子ども

の年齢・興味・関心に合わせて活動を行った。例えば、日本語と継承語での絵本の読み聞かせを行ったり、両言語で会話をしながら折り紙で工作をしたり、オリジナルのお話を考えたりした。

第4回目の中心となる活動は、文字に注目した活動である。自然に関するイラストと文字カードのマッチングゲームを行った。文字カードには、それぞれ中国語（簡体字・繁体字）、タイ語と裏面には日本語が書いてあり、自然をテーマにした言葉である「山」「川」「月」などが書かれている。遊びを通じて、日本語・継承語の文字に触れられるように工夫した。子どもは、「山」と書いてある文字カードと山のイラストのカードを組み合わせ、どれぐらい多くのマッチングができるか、楽しみながら文字を学んだ。子ども一人と支援者で行う場合もあれば、子ども同士が競いながら遊ぶ場面も見られた。教え込むのではなく、楽しみながら日本語と継承語の文字に触れ、自然なインプットを与えることができたのではないかと思う。しかし一方で、子どもによっては語彙レベルや文字が簡単すぎたり難しすぎたりした。語彙の数を増やしたり、テーマに縛られない様々な文字カードを用意したりしておく必要があると感じた。

最後の作品作りでは、子ども達はテーマに縛られずに思い思いの作品を作り、皆の前で発表を行った。最後に発表の場を設けることにより、子ども達が達成感を味わうことができるように工夫している。また、発表が終わった際には、参加賞として賞状とメダルを渡した。

3. 1 事例報告 Aちゃん（台湾ルーツ）

ワークショップ当日の記録から、以下の事例を報告する。

Aちゃんは台湾にルーツを持つ5歳児で、今回で2回目の参加となった。全体の読み聞かせが終わるとすぐに、Aちゃんは自ら絵本を選び、支援者は中国語と日本語の両方で読み聞かせを行った。Aちゃんは中国語の問いかけには中国語で答え、日本語での問いかけには日本語で答えた。また、文字とイラストのマッチングゲームは、すべてのカードの意味と読み方を理解していたため、Aちゃんには簡単すぎたようだ。今回は、「全部できてすごいね！」と言って終わりにしてしまったが、今後は「他にどんな言葉を知っているの？」と、問いかけるなど、さらにアウトプットを引き出すようにしていきたい。

4. まとめと今後の課題

これまで4回のワークショップを行ってきたが、回を重ねるごとに活動案の改善を行ってきた。第2回目から絵本の読み聞かせを取り入れ、読み聞かせの中で自然に日本語と継承語のインプットを与えることを行ってきた。また、教え込むのではなく、楽しみながら言葉に触れ、両言語のアウトプットを促すことにも努めてきた。そのため、子ども達の自然なアウトプットを促すことができたと思われる。しかし、参加者の子ども達の年齢に幅があるため、それぞれの子どもの興味・言語レベルに合わせ、臨機応変に対応できる活動案を検討する必要があると思われる。また、今回作成した文字カードは白黒だったが、カラフルなものにするなど、より子どもに興味を持たせることができる工夫が必要だと考えられる。さらに、読み聞かせ中心の活動だけではなく、体を使って音に親しむ活動や、子どもと支援者のペアではなく、全体でできる活動なども検討していきたいと考えている。